



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

四旬節第3主日B年(2021年3月7日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：出エジプト記 20章1－17節

第二朗読：使徒パウロのコリントの教会への手紙 1章22－25節

福音朗読：ヨハネによる福音書 2章13－25節

今日のテーマ：十字架のイエスさまと共に始まる新しい礼拝

三つの朗読から

第一朗読にある「わたしは熱情の神である」(5節)という神さまの側からの自己表明は印象深いです。神さまは熱意の神、熱情の神です。人間に対して強い想いを抱いた神なのです。その熱情の故に、時にはねたみのような感情もわき上がるそんな神です。それほどに神さまは人間を愛して下さいます。今日の朗読にある十の掟はわたしを愛し、導き出してくださった神さまへの、わたしの側からの愛の応答となります。

第二朗読の「神の力、神の知恵」(24節)は、信じない者にとって愚かしいものに見える十字架のキリストこそが神の力であることを伝えていています。イエスさまは神さまから愛されている「神の子」でした。愛されている人が、その愛に応えようとするときに、イエスさまにとっては十字架しかなかったのです。

福音の中の小さな言葉「熱意」は、イエスさまのおこころを表します。神さまは「熱情の神」です。イエスさまも同じく「熱意」の人です。動物や商人を追い出すイエスさまのおこころの中には神さまへの「熱意」が働いていたのです。それは、人間の思惑に汚れてしまった神殿を本来の姿へ変えるという「熱意」だけではなく、ご自分が「しるし」となり、父なる神さまへの犠牲となるという覚悟です。こうして、新しい礼拝が始まります。

## 説教

掟を守るとことは大切なことです。しかし、もっと大切なのは掟を生きることです。今日の第一朗読で示された十の掟(十戒)は、守るだけでなく、生きるためにあるのです。神さまとの関わり、人との関わりを生きる上で掟は必要なものとなります。しかし、いつの間にか掟を守ることだけに関心が向かいます。そして守っている人はプライドと誇りに満ち、守っていない人を裁きます。

ところで、今日の福音の場面は神殿です。神殿は神と人が出会う場所です。しかし、イエスさまの時代は、神への犠牲を献げる、献げ物ばかりに人々の関心があつたようです。いつの間にか、神殿は献げ物の便宜をはかる商売人であふれていました。

「熱情の神」から愛された「愛する子」であるイエスさまもまた、熱情の方でした。動物や商人や両替商を神殿から追い出します。それは神の家である神殿が人間の思いに汚れてしまうことが許せなかったからです。

また、それだけではありません。イエスさまが羊や牛や鳩を神殿から追い出すのは、イエスさま自身が犠牲となる覚悟がおありになったからです。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」とイエスさまはおっしゃいます。この文章を「もし、この神殿を壊すなら」と条件文で考えてみてもよいですが、文字どおり命令形として、つまりイエスさまからの命令として理解することも可能です。そうなりますと、「お前たちは、商売や両替商で神殿を壊し続けよ、しかし、わたしは新しい救いの時代を開き、新しい神殿を建てる。この神殿では『牛』も『羊』も『鳩』もいらない。なぜなら、わたし自身がそれらに代わる新しい犠牲となるからだ」というような意味となるでしょう。

しかし、残念なことに、人々にはイエスさまのこのおこころが分かりませんでした。というのも人々は神殿で動物を献げるという仕方以外での神さまへの真の礼拝が分からなかったし、それを想像することもできなかったからです。神殿の境内で牛や羊や鳩を売り、両替をするという人間の小賢しさにこだわってしまうと、神の愚かさである十字架の犠牲が分からないのです。

イエスさまは新しい時代を始めます。それはご自分が「しるし」となる新しい礼拝の始まりです。イエスさまの十字架は神と人をつなぐ「しるし」なのです。同時に「熱情の神」の愛の「しるし」なのです。

四旬節の後半、イエスさまの十字架を見つめる日々を過ごしましょう。